反省会記録

1. 反省会の概要

12月13日(水)午後、今回の日越幼児教育共同セミナーを総括する反省会を、お茶の水女子大学 生活科学部本館 理事室(220 号室)において、13 時から 16 時まで実施した。参加者は、ハノイ師範大学側教官 3 名(Dr. Dinh Hong Thai、Dr. Nguyen Thi Hoa、Dr. Thi Phuong)、お茶の水女子大学教官 6 名(内田伸子、箕浦康子、牧野カツコ、大戸美也子、山本茂浜野隆)に加え、通訳永井蘭、記録係小高、青木、村松の計 12 名であった。(うち浜野、山本、青木は公務のため途中退出)

反省会は、「フィードバックアンケート」(前項参照)に対するハノイ師範大学側からの回答の提示とそれに対する質疑応答を中心に行われ、最後にハノイ師範大学とお茶の水女子大学との今後の学術交流の方向性や課題についての検討がなされた。ベトナム側からは、まず、日本の社会システムの素晴らしさや日本人の人間性に対する好印象が述べられた。そして、今回の講義・視察のプログラムならびにお茶の水女子大学教官との日々の討議を通して得た有意義な経験を、帰国後にどのようにしてベトナム国内の幼児教育関係者と共有していきたいか、「子ども中心の幼児教育」の理論をいかに広め、実践していきたいか、各々から展望と具体策が紹介された。短期間の来日ながら、日本の幼児教育の取り組みの本質を十分に把握した上での的確なコメントが、次々とベトナム側から提示されたことで、日本側は今回の成果を実感できた。3時間に及んだ議論の末、日越の幼児教育の未来をよりよいものへと発展させていくための、相互の学術協力を約束して締めくくった。

2. 研修反省会の主な内容

(1) 来日の成果

ベトナム側から今回の来日の成果として繰り返し強調されたのは、「子ども中心の幼児教育に対する経験と理解の深まり」と、「理論の実践への応用の重要性」であった。例えば、「子ども中心の幼児教育」の理論が、教師のなかでどう身体化され表現されているか、教師と子どもの関係においてそれが具体的にどう展開されているか、園の環境にどういった形で反映されているかについて、多くの新鮮な発見があったという。また、お茶の水女子大学附属幼稚園の実践からは、いかに子ども日々の成長の姿を観察し記録を書くか、その記録を基に次の保育をどのように組み立てていくか、自由保育における指導計画の作成や保育方法の検討について大きな収穫があったという。今回来日した教官らは、旧ソ連への留学経験もあり、ヴィゴツキーをはじめ海外の幼児教育理論に対する造詣も深く、またベトナムにも固有の幼児教育理論があるとされる。しかし、日本で「子ども中心の幼児教育」に対する経験と理解を深めたことによって、改めて、理論を現場の実践に応用するということはどういうことか、理論と実践を結びつけた教員養成とはどうあるべきか、省察する機会ができたという。「今回の来日で出会った教官や現場の教師の態度や意識を思い浮かべ、まず、教え方を自分自身から変えていきたい」という前向きな意見も出された。

(2) 来日の成果の共有とベトナムの今後の課題

ベトナム側からは、日本での経験を帰国後に同僚や学生らと「共有する」ことが、今回の来日の成果を生かすもっとも重要かつ優先課題として挙げられた。特に、「子ども中心の幼児教育」の紹介は「最も取り組みたいこと」であり、ハノイ師範大学での講義や幼児教育関係者向けのセミナーの開催、メディアへの広報活動を通じて紹介したいという案が出された。一方で、「子ども中心の幼児教育」への転換は、ベトナムの幼児教育の現状を踏まえると、「最も実現しにくい、応用しにくい」のも事実だという。その理由として、例えば、ベトナムでは、中央集権的国家体制によって、幼児教育に関わる予算や保育内容、方法など全て

の面が政府により管理統制されており、民主化以降、若干その縛りは緩やかになったとはいえ、現場は「籠の中で自由に動きなさい」という程度の裁量しか与えられず、大学にも大きな権限がない。また、教育訓練省の行政官はじめ幼児教育関係者が、海外視察で得た新しい幼児教育の取組みは、得てして十分な調査や検討がなされないまま性急に導入される結果、うまく適用できない場合が多いという。さらに、政府から、全国の園で、同じ時刻に同じ教育内容を教えることが要求され、それを遵守しているか否か監査があるという厳しい条件のなかでは、教師が問題意識をもち改革を行っていくための柔軟性・自主性が不足しがちだという。その意味で、まずは現場に立つ教師個々人の意識啓発が大きな課題だとされた。

このような課題を解決するために、大学の附属幼保園で模範を示すことが、「子ども中心の幼児教育」へむけての改革に、最も効果的で社会に与える影響力も大きいことはベトナム側も認識しているという。しかし残念ながら、ハノイ師範大学には現在に至るまで附属幼保園が設置されておらず、申請中はしているが依然として認可が下りないという。付属設置に対しては、財政面で問題が山積しているだけではなく、たとえ設置されたとしてもベトナム特有の管理統制ゆえに、改革することは難しいのではないかという意見も出された。

したがって、「まず、学生たちの意識を変えるが一番、その卒業生が現場でその意識を行動に移すことができれば一番よい、そうやって日本の成果を伝えていきたい」という結論に達した。日本側からは、「日本の幼児教育も 130 年前に海外から輸入して、時間をかけて変えてきたが、改革の原動力となったのは現場の保育者だ」という、経験が紹介された。

(3) 今後の国際協力の展望と共同研究の可能性

今後の展望と検討事項は下記の表に譲るが、今回の交流を踏まえ、以下のようなことが協議された。まず、ハノイ師範大学では、①日本の幼児教育の経験や知見を共有するため

の報告会やセミナーの開催、②新聞などメディアに対する広報活動、③学生への指導の徹底、お茶の水女子大学では、①留学生の受入れ、②グローバル COE のプログラムに「東アジアの幼児教育の拠点形成」の計画案を申請し、今後の共同研究の可能性を広げる、③次の学術交流として、「保育の質を向上する日越共同セミナー」開催を、2008 年春を目途に計画し、双方で準備を進めることが挙げられた。ベトナムでも近い将来、幼児教育の学会を立ち上げたいとの希望が出されたが、例えば、そうした学会で、日越双方の保育観察ビデオを視聴し、比較検討する共同研究のアイデアなども提示された。

3. おわりに

近年、幼児教育分野における国際協力への関心の高まりは著しく、国際社会の中では日本の貢献に大きな期待が寄せられている。反省会では、日本からのベトナム幼児教育支援は、緒についたばかりであることが指摘されたが、一方、注目すべき動きとして、ベトナム政府が、最近「幼児教育開発国家プログラム」に署名し、方針の転換を図ろうとしている点が紹介された。よって今後ますます、ベトナムと日本との間で、幼児教育分野での連携が必要とされることは確かである。明るい未来の訪れを予感させる時期に、ベトナムと日本の幼児教育研究・実践についての相互理解を深める学術交流の機会を得られただけではなく、今後の協力関係について建設的な議論ができた点で、今回の日越幼児教育共同セミナーの開催には一定の成果が認められよう。

今後の学術交流に関する検討事項

主体	内　容	備 考
ハノイ師範大学	1.　訪日３名の共同報告会及びセミナーの開催 （日本の経験と知見を共有するため） 2.　広報活動 ・　来日報告を新聞に寄稿 ・　学会誌や幼児教育雑誌への寄稿 3.　授業を通して学生に指導	・報告会・セミナーの開催や掲載記事については、メールで日本側にも報告 ・広報活動では、お茶の水女子大学名を必ず明記するよう依頼
お茶の水女子大学	1.　留学生の受け入れ 2.　グローバル COE プログラム「東アジアにおける幼児教育拠点形成」計画案の申請・共同研究等の可能性を検討	・留学生受入れについては、JIC/JSD 事業を照会 ・現時点で、留学希望者 1 名の受入れ準備中
越日共同	1.「保育の質を向上する越日共同セミナー」開催の検討 ・開催時期・2008 年３月下旬～4 月初旬 ・場所・ベトナム、ハノイ師範大学	・ハノイ師範大学への申請など、体制を整える ・日本側も科研費の申請を検討